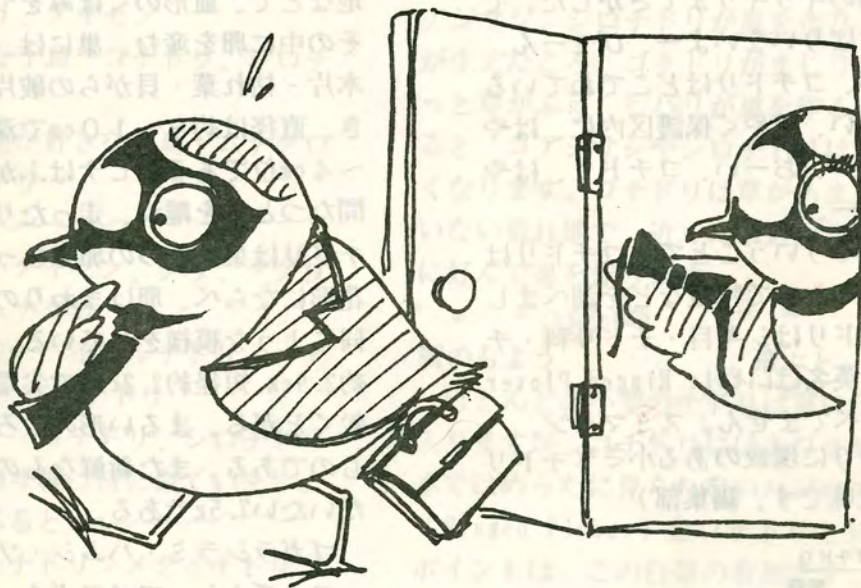


すずがも通信49

行徳野鳥観察舎友の会会報 1988年4月1日発行

特集

コチドリ



市川 拓画

特集 コチドリ

白石 隆典

春で連想する鳥はいろいろある。このなかで1番に印象的なのは、コ・コ・コチドリ。春よこい、はやくこい、コチドリおでなさいよーという具合にコチドリをさがすのですが、毎日、毎日、今日こそは、と期待して行くのに、いたと思うとシロチドリだった。まったくコチドリはなにやってんだと思う毎日だった。そして、この原稿の締切のギリギリまでさがした。でも、やっぱりいないよー、びえーん、ぐやじい、コチドリはどこでねているのだ。おい、はやく保護区内に、はやくこいよー、おーい、コチドリ、はやくこいよー。

まあ、そういうことで、コチドリは見れなかったので特徴などを調べました。コチドリはシギ目・チドリ科・チドリ属で英名はLittle Ringed Plover 意味は調べてません。すみません。(首の回りに環紋のある小さなチドリという意味です。編集部)



コチドリは、しげ・あまつば・かなき・からはしり・ちど・はまちどり・かわらちどり・こちゅんなどの俗名がある。シロチドリよりも小さめで日本ではもっとも小さいチドリである。飛ぶ時などに、ピョピョピーヨピョ、ピューピューピウピウとないて、繁殖期にはビビビビッピッピッとなく。繁殖は、海岸の砂地や川原や湖・沼の砂地などで、皿形のくぼみをつくって、その中に卵を産む。巣には、小石・小木片・枯れ葉・貝がらの破片を多くしき、直径は約8~10cmで深さは約2~4cm位である。ヒナはふかして数時間たつと巣を離れ、走ったりする。コチドリは巣に4つの卵をきっちり十字花形にならべ、卵はまわりの石の色と同じような模様をしている。卵は長径約2.9cm、短径約2.2cmで先端部が急に鋭くとがる。まるい形のころころするものである。また新鮮なものの重量はだいたい7.5gである。

ゴガラシラミ・ハムシ・ゾウリムシ・コミズムシ・マメコガネ・セマダラコガネ・ゴミムシ・カの幼虫やバッタなどの動物質をよくとる。

渡りは本州には、3月下旬頃から渡来してきて、11月上旬頃までとどまる。4月上旬から下旬頃までが渡りのピークである。九州では越冬をすることがある。

コチドリの特徴は、目の回りは黄色で、足はオレンジ色、首のあたりは首輪のように黒い線のようになっている。とにかく、はやく見たい。コチドリやーい、はやくこいよー。

コチドリあらかると

そっくりさん集合

図鑑をあけてチドリのページを見て下さい。どれもこれも同じような顔をして、同じような色で、どう違うかさっぱりわからないと首をひねる方もおありでしょう。

まず住む場所を見ると

河原の好きな千鳥…コチドリ、シロチドリ、イカルチドリ

海岸の干潟が好きな千鳥…メダイチドリ、シロチドリ、ダイゼン

埋立地が好きな千鳥…コチドリ、シロチドリ

耕した田や畑地が好きな千鳥…ムナグロ、ケリ、タゲリ

次は大きさ

大(ハト位)…ダイゼン、ケリ、タゲリ、ムナグロ

中(ムクドリ位)…イカルチドリ、メダイチドリ

小(ヒバリ位)…コチドリ、シロチドリ

この中で次の4種は特に似ています。

大きさ順に並べると
ハト>イカルチドリ>メダイチドリ>シロチドリ>コチドリ>スズメ

イカルチドリは川の中流域に限って見られる種類で、コチドリに似ていますが、体は倍以上も大きいものです。保護区では記録されていません。

残る3種の見分け方→首輪に注目
首のまわりの目立つもよう(色)を見る
メダイチドリ→赤茶色の胸、目が“大”
シロチドリ→前で切れた首輪
コチドリ→つながった首輪、きつい顔

擬傷

かえりかけの卵やヒナに敵が近付くと、コチドリ(ほかのチドリやシギ、カモなども同様)の親は翼をひきずるようにして敵のそばを走り、卵やヒナから敵の目をそらすことがよくあります。まるでけがをしたふりをしているような様子なので、この習性を擬傷(ぎしょう)といいます。

埋立地が大すき

できたばかりの埋立地にまっさきに入る鳥の一つ。ほとんど植物がない時期にはコアジサシ、シロチドリが巣を作り、少し草が生えたころ、コチドリがまじります。もっと草がふえ、ヒバリが巣を作るようになると、コアジサシやシロチドリは繁殖しなくなります。コチドリは草があまり生えていない荒れ地で、近くに水辺があるところに好んで巣を作ります。

翼のまよう

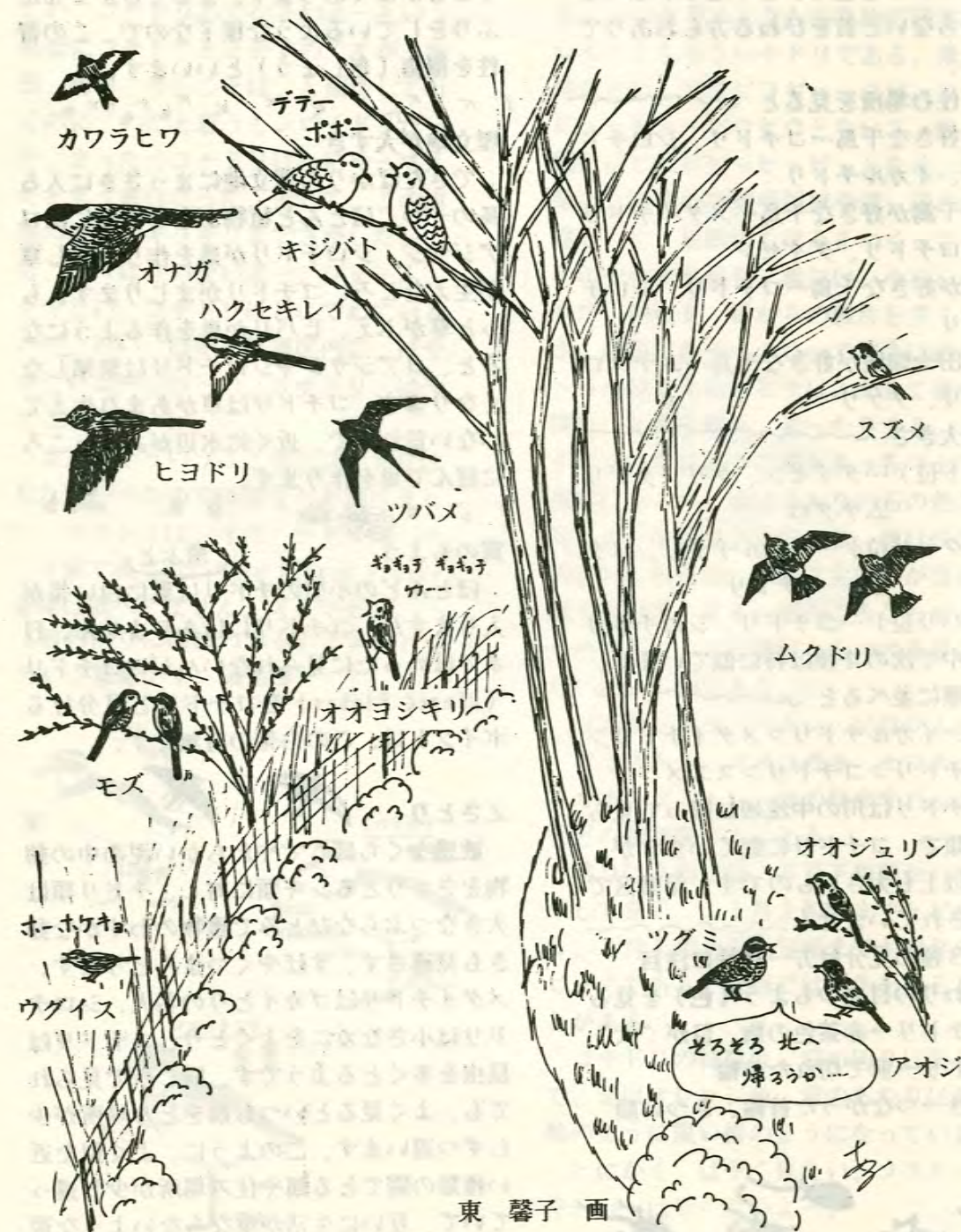
ほとんどの小型のチドリは翼に白い帯が入りますが、コチドリにはありません。日本ではめったに見られないハジロコチドリ(Ringed Plover)をコチドリと見分けるポイントは、この白帯の有無です。

えさとり

敏感なくちばしでやわらかい泥の中の動物をさぐり取るシギ類に対し、チドリ類は大きなつぶらなひとみで獲物のわずかな動きも見逃さず、すばやくつまみとります。メダイチドリはゴカイとりの名人、シロチドリは小さなカニをよくとり、コチドリは昆虫を多くとるようです。同じ所で見られても、よく見るといつも餌をとる場所が少しずつ違います。このように、よく似た近い種類の間でとる餌や住み場所が少し違って、互いに生活が重ならないような習性を“すみわけ”といいます。

ニセアカシアの小道

駐車場から野鳥観察舎までの遊歩道。足を止め、耳を澄ますと、自然の息づかいが感じられます。「ニセアカシアの小道」からのたより——小さな生き物達からのメッセージをしっかりと受けとめましょう。



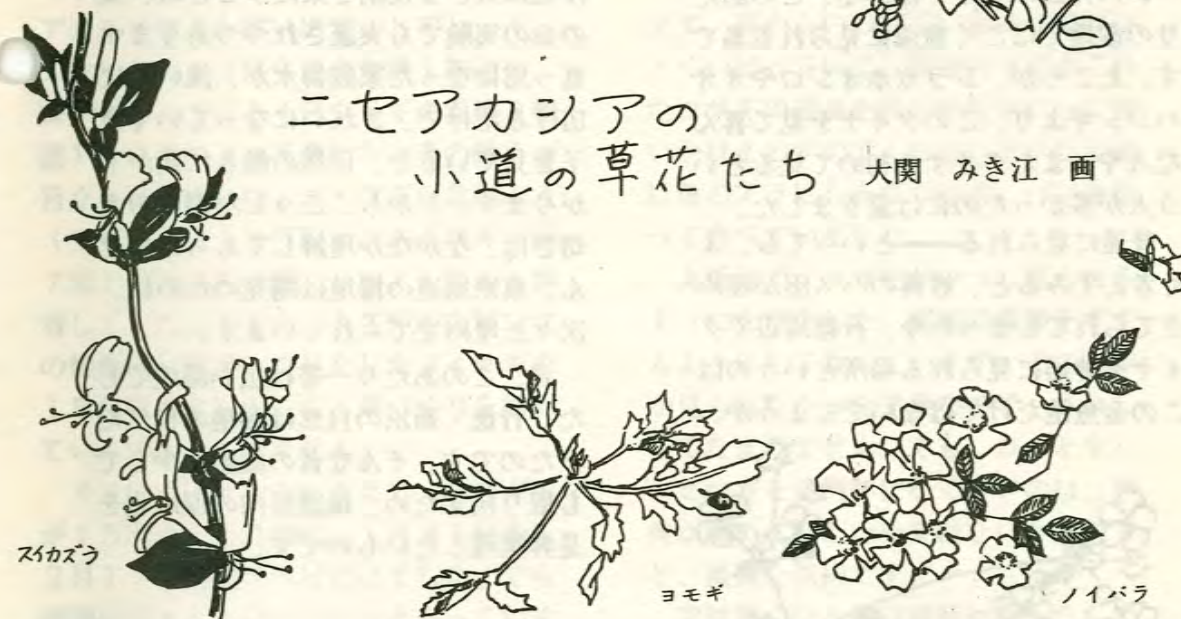
東 馨子 画

春——木々は新芽を吹き、カラカラに乾いたアシの根元からは柔らかい緑の葉が伸び始めました。つがいを組んで巣作りの準備にとりかかる鳥達（キジバト、ムクドリ、モズ、スズメなど）の姿も見られます。草も木も鳥も、新しい営みが始まるのです。私達も、自然の讃歌に耳を傾け、春の喜びを胸いっぱい吸い込みましょう。



オオイヌノフグリ

ウシハコベ

ニセアカシアの
小道の草花たち 大関 みき江 画

☆☆☆ バードウィーク特別行事 ☆☆☆

◎園内観察会、映画会

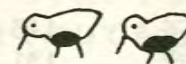
5月14日(土) 午前10時～午後3時

主催：千葉県自然保護課

園内観察会では1日に数回保護区の中を御案内します。まだ保護区の中を歩いたことのない方はこの機会に是非どうぞ。

1階の視聴覚室では野鳥の映画も数回上映される予定です。

◎友の会、特別展示「よみがえれ新浜 新池のできるまで」



5月10日(火)～15日(日)

新しい池では、ユスリカやヤゴがたくさんみつき、鳥も次々と訪れ、「よみがえれ新浜」湿地回復実験は順調に進んでいます。そこで、バードウィークには、「新池のできるまで」を写真などで展示したいと考えています。1階の展示室に展示する予定ですので、ぜひお立ち寄り下さい。

はとお

クイナ考……………東 良一

先日の観察会でのことです。珍鳥シラガホオジロを見た後、北池脇の金魚池へ、これも珍鳥オオハシシギを見に行きました。もう、新浜で4年も続いて越冬しているオオハシシギが、長いくちばしを水中に入れ、ゆっくりと餌をとっている様子をながめっていると、アシ原の中からクイナが現れました。パンの仲間のクイナは、冬、このあたりの湿地ではごく普通に見られる鳥です。ところが、シラガホオジロやオオハシシギより、このクイナを見て喜んだ人や、またクイナを初めて見るという人が多かったのには驚きました。

普通に見られる——といっても、よく考えてみると、妙典のハス田が埋め立てられてしまった今、行徳周辺でクイナを普通に見られる場所というのはこの金魚池だけではないでしょうか。



キジムシロ

大関 みき江 画

新 入 会 員

東京周辺を考えてみても、クイナが生息できるような淡水の湿地はもはや、数えるほどしか残っていないのです。観察会に参加された方々が喜ぶわけです。

湿地は野生生物だけでなく、人間の生活にとっても大きな価値を持っているといわれます。現に、湿地が水質の浄化に大きな役割を果たすことは、友の会の実験でも実証されつつあります。真っ黒になった家庭排水が、浅い池に広げるだけで、きれいになっていく様子を見ていると、自然の働きに頭が下がります。しかし、こうした湿地の大切さは、なかなか理解してもらえません。東京周辺の湿地は開発のために、次々と埋め立てられています。

昔、このあたり一帯は広い湿地でした。行徳・新浜の自然は湿地の自然だったのです。そんな昔の面影を少しでも取り戻すため、保護区内の湿地化を是非実現したいものです。

鳥の国から

蓮尾純子

ホー ホベチヨ ホキヨキヨ

ウグイスが竹やぶでしきりに鳴いています。まだちょっとへたくそですが、鳴きはじめてのころにくらべるとだいぶ上手になりました。「ニセアカシアの小道」を歩くと、いろんな鳥のさえずりが聞かれます。メジロ、モズ、ムクドリ、シジュウカラ、そのうちにアオジやツグミ、アカハラなども歌い出すことでしょう。

ツルシギ（3月9日金魚池1初認）、コチドリ（3月14日ウラギク湿地3初認）。3月に入って鳥たちの春の動きが目立ってきました。ゴイサギが急にふえ（3月14日125羽）、ダイサギ（同7羽）やコサギ（同20羽）も南から到着してきたようです。あざやかなピンクの婚姻色に染まった足をしたゴイサギを15日に見ました。もう巣づくりを始めているのかもしれませんが。

カモはずっと少ないままで、スズガモが1万羽をこえたのは、1月31日から2月17日の間の8日だけでした。でも種類はちゃんとひとつおそろっています。今年はオカヨシガモがいつも50羽近く見られます。渋い色調におさえた地味な姿で、「粹」そのもののようなきれいなカモです。スズガモが他の種類の中にはほんの数羽まじっていると、すっかりした白と黒の羽がびっくりするほどひきたって見えます。カモが少ないのはさみしいけれど、それなりにじっくりと美しさを楽しむことができるようです。これ負け惜しみかなあ。



1月末から3月はじめは1年のうちで鳥の餌が一番少なくなる季節。この時期を乗り切れれば、草や木の芽は出し、虫や魚も動きはじめるので、飢餓の季節も終わります。逆に人間の側から見ると、餌場にいろいろな鳥が集まる面白い時期ということになります。観察舎前の餌場では、セグロカモメやゴイサギ、バン、ドバトなどの常連にまじって、今年はツグミ、ヒヨドリ、イソシギ、コサギなどがいつも見られます。前からいつているコサギがひどくいばっていて、新参のうすよごれたコサギの若鳥を目のかたきにして追いかけてまわすので、かわいそうな若鳥は魚のアラにもありつけず、パンを拾って食べていました。

丸浜川で、コガモがいつも見られるようになりました。泥底の藻類をすするようにして食べています。ここ何年か見られなかった光景なので、うれしくてたまりません。でも、コガモやハシビロガモが例年になく多いのは、妙典が埋められたためではないかと思うと、複雑な気持です。

突然寒くなる時は何度かあったものの、今年は結局暖冬で終わるのでしょうか。ニワトコの丸い芽はすっかりほどけたのと、もう少しでほどけると木ごとに早い遅いがあります。ノイバラは芽というよりも若葉。オオイヌノフグリやホトケノザ、ヒメオドリコソウなどはあちこちで咲きそろい、カラスノエンドウまでのびてきたというのに、タンポポ類は今ひとつ。どうもちぐはぐな早春です。でも沈丁花のかおりとウグイスの歌があれば言うことはありません。あとは、新しい池にツルシギが入り、コチドリが巣を作ってくれればいいのですが。

名簿の訂正・住所変更

水車ニュース

1.01 > 1.0018 (なんのこっちゃ)

野鳥観察舎の正面玄関のすぐ前の水の中に、赤錆びた太い鉄管が立っているのをご存じですか。あのあたりが何度も書いてきたしゅんせつで生じた深みです。その深み（水が一番少ない時で深さ60cmほど）の一番底の部分の水を、灯油ポンプを使ってうまくみ上げて、毎月2回水質調査をしています。いつも、くむとプーンと卵がくさったような硫化水素の臭いがします。

3月10日のこと、底の水をくんだとたんにおやっと思いました。臭いがごく弱いのです。底の水、中間（深さ約30cm）の水、表面の水と3通りとるのですが、空気に触れる表面の水には臭気はなくても、わずか30cmの深さの中層の水はたいい硫化水素臭があり、底の水は鼻が曲がりそうに臭いのです。ここしばらく、この時のように臭いが弱いのは初めてのことでした。

測定の結果も臭いによる印象とぴったりで、CODは5(100+)、アンモニアは3(10)、硫化水素0.3(9)；いずれも単位はPPM、()内は前回の2月24日の測定値；というびっくりするような減少を見せていました。もちろん数値が少ない方が水質がよいわけですが、これまでの最悪例の1月2日などは、それぞれ1000、35、90だったのですから、CODが2百分の1、アンモニアは十分の1、硫化水素は何と3百分の1です！

ところが、どうしてこんなに底層水の水質がよいのか、さっぱりわかりません。底の泥の状態は、前回とそれほど差がないのです。底生動物調査で採集されたイトミミズなどは、むしろ前回より少なくなっていました。

さあて、お立ち会ひ。この謎のお答えをいたします(たぶん)。実は、ここしばらくというものの、丸浜川はずいぶん塩からかったのです。たぶんひでりが続いて干上がってしまった北池に海水を導入していたため、水路、水門穴などを通じて丸浜川にもかなりの海水がまじったのだと思われます。ふだんはむしろま水に近い表面の水が、海水の5分の1くらいの汽水になっていました。それと水質がどういう関係にあるのかおわかりになりますか。

実は、底の水がひどく汚れるのは、水が動かず、ずっと滞留しているためです。なぜ滞留するかというと、時々流入する塩分の多い水は比重が重いいため、底にたまります。丸浜川の水は排水機場でポンプ排水され、海に出るのですが、深みにたまった水はほとんど海水に近いほどの濃い塩分濃度で、表層の水が動いていっても、どうもがんとしてそのまま動かないようです。

ところが、表面の水に海水がまじると、表面と底の水の比重があまりかわらなくなります。これまでの測定では冬の間はいつも底の方の水温が高かったため、ようやく水の対流が起こります。かくしてがんこに底にしがみついていた塩分の濃い、汚れほうだいになった水が表面に上がって、流されて出ていってしまうというわけです。

塩分があることは、生物にとってあまりよいこととは言えません。ことに水生植物には致命的です。正直なところ、困ったなと思っているのですが、妙なところで、妙な効果があるものだと妙な気分になっています。

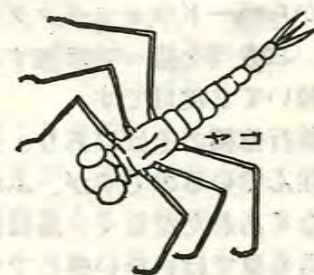
新しい池の方は、1、2月はさんざん目にあいました。というのは、雨が降らなかったというためではなく、丸浜川の両端にあたる湊排水機場と猫実排水機場で、毎日徹底的にポンプ排水をした結果、丸浜川の状態はたいへんよくなったのですが、池にポンプアップする水までなくなることがしょっちゅうあったのです。ただそれだけならどうということもないのですが、池までは延々350mの塩ビパイプがのびています。水がとまると夜気や直射日光で温度変化の影響を受け、パイプはせつせつとび縮み、そしてつなぎ目ではずれてしまいます。揚水ストップ、パイプはずれ、パイプなおし、揚水再開のくり返し。とうとう水不足で下池がほとんど干上がるところまで行っていました。

絶好のチャンスとばかり、2月10日と11日には下池で島作りをしました。将来、水鳥の繁殖に役立ってほしいとの願いはいつ実現するのでしょうか。大きい方が“かなへび島”、小さい方は“うらみ島”です。名前の由来は、いつか命名者に書いてもらいたいと思っています。

パイプのつぎ目につけた“そうじ口”という部品を肉厚のものに替えたため、どうやらパイプはずれはだいたいきりがついたようです。暑くならないうちにパイプ全体に土をかぶせれば、トラブルは解消するはずだと楽観しています。

2月28日の新池の底生動物調査では一時干上がっていたところも含めて、全部の測点でシオカラトンボのヤゴが見つかりました。本当に、数日間とはいえ、泥の表面がほとんど乾いていたのです。えらいものですね。時には干上がった海水をかぶったりするところで生き抜いてきただけのことはあります。夏になっ

てヤゴのぬけがらや、おつなりのトンボが見られたら、どんなにうれしいことでしょう。



この冬はずっとひでりが続いたのに新池までの観察路の表面はしめり気を保っていました。旧淡水池も、泥底を見せませんでした。ばさばさに乾いていた保護区の本土が、かなり広い範囲にわたって、水分の供給を受けているようです。新しい池の造成とポンプ揚水の効果は、もしかすると、セイタカアワダチソウの荒野をアシ原に戻すほどの大きなものになるかも知れませんが、かな？

1.01 ; うすい海水の比重(20℃)

1.0018 ; 4℃の水 / 20℃の水

水は4℃の時に最も比重が重く、それより温度が低くても高くても軽くなります。4℃以上の水温では、高くなればなるほど比重が軽くなるので、お風呂でよくわかるように、水温が高く軽い水は上に、水温が低く重い水は下になります。夏は気温が高く、表層の水が暖められるので、対流が止まり、汚れた水域では底層の酸欠が起こります。冬は気温が低く、表層の水の方が冷たくなるため、対流が続き、底層の酸欠は起こらないのが普通です。ただし海水は淡水よりずっと重いので、淡水とまじるところでは、常に海水が底淡水が表面を流れます。

さえずり

3月13日新浜探鳥会に参加して……加藤万里子

今年からバードウォッチングを始めました。お弁当を持って参加するのは2月に続いて2度目です。

家が新行徳橋のそばにあり、土手の近くに住んでいるのですが、ふだんはなんとなくあわただしく、鳥は目に写りながらも見てはいない感じです。探鳥会の日には鳥を見るんだという「目的」がはっきりしています……。

この日、印象に残ったのはまずセイタカシギ。赤い足が長くて、体の大きさの割には背が高い。お昼を食べている間中、2羽並んで近くを歩いてくれたので、ゆっくり見られました。

キンギョ池にはオオハシシギがいました。ながあーいくちばしです。

私はまだ双眼鏡も持っていないのですが、まわりの人は皆親切で、対象に

オオハシシギ

(2月14日新浜観察会)

ぼくはこの鳥を初めてみた。くちばしがすごくおもしろい形でした。フィールドスコップで見るとなおよく見え、おなかのしましまがいんしょうてきでした。(深水 大和)



大関 みき江 画

ピントを合わせた上で見せてくれますほんとにありがとう。

鳥の名前もいくつか覚え、カモの類サギの類、シギの類などいくらか見当がつくようになりました。

最後のまとめの時、個々の種類の数まで把握している人の多いのにはびっくり。みんないい眼なんだなあー。

新浜の鳥の種類はだんだん減っているとのこと。孫やひまごの代にも多種多様な生き物を残したい。それできょうも粉せっけんで洗濯しています。

ぼくはこの鳥を初めて見た。くちばしがすごくおもしろい形でした。フィールドスコップで見るとなおよく見え、おなかのしましまがいんしょうてきでした。



オオハシシギ

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会(毎月第2日曜日) 4月10日、5月8日

集合: 東西線行徳駅前 午前10時

解散: 行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当: 東 良一

持物: 昼食、飲み物、バス代(大人290円、子供150円)

妙典の湿地がなくなり、すっかり寂しくなりましたが、江戸川放水路ではメダイチドリやトウネンなど春の渡りのシギ・チドリを観察することができます。河口付近で昼食後、午後は保護区へ。新池でツルシギやコチドリが見られるかもしれません。バスに乗りますので小銭のご用意を。



☆定例園内観察会(毎月第1・3日曜日) 4月3日・17日、5月1日・15日

集合: 行徳野鳥観察舎前 午後1時半

解散: " 午後3時半

担当: 観察舎 蓮尾、協賛 友の会

もうすっかり春! 柔らかな風、緑の草花……春をじっくりとかみしめながら保護区の中を一廻りしてみませんか。新池で身近に水鳥が観察できるのも楽しみです。

☆夕暮れ観察会

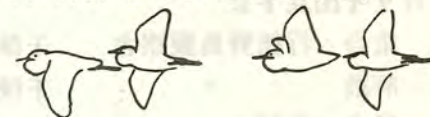
4月24日(日)、5月22日(日)

集合: 行徳野鳥観察舎 午後5時

解散: " 午後6時半頃

担当: 観察舎 蓮尾

日がすっかり長くなりました。ネグラへ向かう鳥達を観察しながら、保護区の中を歩きます。まだまだ寒いので、上衣を一枚お持ち下さい。



☆丸浜バードリバーを調べよう(毎月第1日曜日) 5月1日

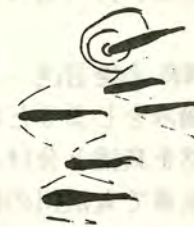
集合: 行徳野鳥観察舎 午前10時

解散: " 午後3時頃

担当: 東 良一

持物: 長ぐつ、タオル、ビニール手袋

丸浜川と新池の底泥を採取し、中にある生物を探します。3年前は死の川だった丸浜川でも最近では生物が毎回、見つかるようになりました。午後から、視聴覚室でソーティング(生物を探す)調査をしています。お気軽に御参加下さい。なお、4月の調査はお休み、5月から毎月第1日曜日になりましたのでお間違いなく。



募集

コイ、フナ、クチボソ、ザリガニ、オタマジャクシ、水草など……放流・移植にご協力いただけませんか。去年作った新池をより魅力的にするために動植物を受け入れています。(雷魚など肉食魚はおことわり。)

☆真間川の桜並木満開キャンペーン

4月9日(土)・10日(日)

場所：富貴島小学校裏手

(午後1時~午後5時) (午前11時~午後5時)

主催：真間川の桜並木を守る市民の会、平松 南、協賛 友の会他

とうとう工事が始まり、あまりお花見気分とは言えないそうですが、パネル展示や手作りせっけんの販売などを行う予定とのことです。自然な姿の真間川を何とか残して欲しいものですね。友の会でも展示や販売を行います。

☆観察してみよう！コチドリくん

4月16日(土)

集合：行徳野鳥観察舎 午後1時半

解散： 〃 午後3時

担当：東

かわいいおめめのコチドリくんを、じっくり観察してみましょう。



☆水鳥カウント

4月29日(金・祝)

行徳周辺の開発は相変わらず進んでおり、野鳥の数は年々減少しています。私達を取り巻く環境を改めて見直してみましょう。参加ご希望の方は東 まで。

☆バードウィーク特別行事

5月14日(土)

例年通り、観察会・映画会等が行われます。詳しくはP5を。

☆サギ山見学会

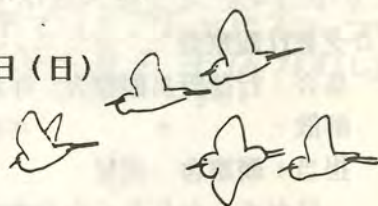
5月29日(日)

集合：行徳野鳥観察舎 午後1時半

解散： 〃 午後4時頃

担当：蓮尾

予約制です。東 まで電話でお申込下さい。定員30名、定員になり次第、打ち切らせていただきます。雨天決行。



編集後記

草摘みをしようと江戸川の土手に行ったら、「除草剤散布」の立て看板。残り少ない自然を鳥達と分けあえるのは、豊かな春だけなのに……！（馨）

自転車であらび川のほとりを走りながら鳥のカウントをしたら、合計10羽以上のコガモが泥の表面の藻類を食べていました。帰り道では何とひさびさにハシビロガモのつがいまでいてびっくり。今年こそバンやカルガモのヒナが育ちますように。（純）

すずがも通信 No. 49

1988年4月1日発行

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

年会費 一般1000円、ジュニア500円

発行人 東 良一

事務局

編集 蓮尾純子、東 馨子

行徳野鳥観察舎